

朝鮮古代史からみた鞠智城

—白村江の敗戦から隼人・南島と新羅海賊の対策へ—

濱田耕策

はじめに

六六三年の白村江における古代日本の敗戦は執権層に深刻な危機意識をもたらしたに違いない。王族や官人をはじめ百済人が盛んに亡命してきたことと相俟つて、唐・新羅の連合軍が倭の派遣軍を追撃して列島を襲い来るやも知れない危機感から、大宰府の守備を中心とした防衛施設網を西日本に構築することになる。

ここでは、鞠智城が七世紀後半に朝鮮半島の戦争動向に備えて築城されて以来、九世紀半ばにも鞠智城は半島情勢に危機感を高めて大宰府との連絡を密にするに至るこの三世紀に亘る鞠智城の歴史を朝鮮半島の政治と社会の動向から考察する。



図1 発表中の濱田耕策氏

白村江敗戦の翌六年五月には百濟の故地を占領統治する唐の鎮将の劉仁願が郭務悰を倭国に送ってきた。郭務悰は十二月まで倭国に滞在した。郭はこの間に倭国の軍事を探つたに違いない。たゞ、郭は唐から半島へ、半島から北部九州、そして瀬戸内の長い航海をどのように記憶し、またこれを劉仁願に復命したであろうか。郭は唐が倭国に派兵することは倭国軍が白村江の海戦で敗北した轍を踏む危惧を抱いたのかも知れない。その実では北の高句麗戦に進むべく、派兵を匂わせて倭国を威圧する外交を行つたに違

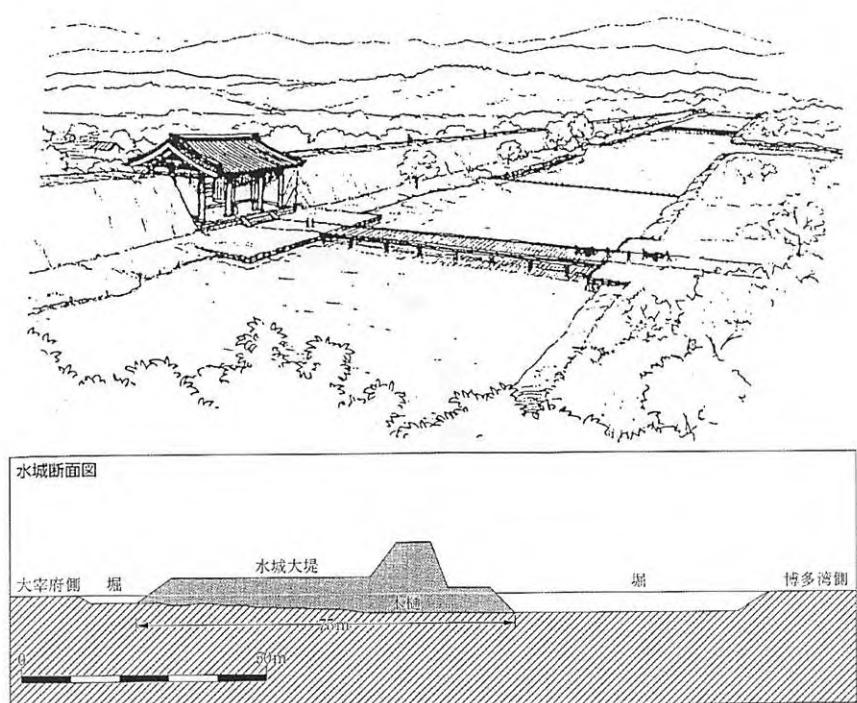


図2 水城の復元図（上）と断面図（下）

（復元図：九州歴史資料館 1988『発掘が語る遠の朝廷 大宰府』、
断面図：岡田茂弘監修 2002『復元するシリーズ② 古代の都を
復元する』学習研究社 より転載）

い
な
い。

大和王権では半島情勢に向けた危機感は極まるのである。その対策が大宰府と大和の防衛網の構築である。『日本書紀』巻第二十七・天智天皇三年（六六四）の「是歲」条には、「対馬島・壱岐島・筑紫国等に、防「さきもり」と烽「すすみ・のろし」をおく。また筑紫に大堤を築き水を貯う。名づけて水城と言う」とある。大宰府の西北には博多湾が控えており、府の近くにも水の防御を配置した。郭務悰が伝えた百濟故地に駐留する唐の将軍劉仁願の外交と半島情勢に倭国は反応したのである。

また、翌年の天智天皇四年（六六五）「秋八月」条には「遣達率答・火十本・春初（だつそちたふほんしゆんそ）を遣わし、城を長門国に築かしむ。達率億禮福留（だちそちおくらいふくる）と達率四比福夫（だつそちしひふくぶ）とを遣りて筑紫国に大野及び櫟（き）城を築かしむ」とある。水城とこれに東西で連なる山城とによる大宰府防衛の第一歩が築かれた。

この憶禮福留は六六三年九月に百濟から倭国に逃げ来つていたから、大野と櫟（き）城の築城に



図3 百濟の都城（泗沘）
朴 淳發 2004『泗沘都城』『東アジアの都市形態と文明史』国際日本文化研究センター より

は白村江の敗戦を前後する頃に亡命してきた百濟人の知識と技術が働いている。この大宰府防衛のプランニングには森公章氏や亀田修一氏らが示唆するように（一）、百濟の都城防衛網が参考にされていよう。百濟初期の都の漢城（ソウル特別市松坡区の風納洞土城と夢村土城）はその西北に流れる漢江の流れと東北から東南部に山城を構えている。また、四七五年に百濟は高句麗に逐われて南の忠清南道の熊津城（公州市）に遷都し、さらに六十三年後の五三八年には熊津城から錦江を下つた泗泌（扶餘邑）に遷都したが、この二都も錦江の流れを西北の護りとして、都の四方には山城を配置していた。百濟の三都を守備する水流と山城の防御網の知識は、兵法に熟達していたと



図4 保存整備が進む国史跡の鞠智城跡

伝わる達率の答・火十本・春初や憶禮福留らの亡命
百濟官人によつて倭國に導入され活かされたと考えら
れる。

さて、鞠智城が大宰府防衛網に組まれるのは次の段階である。憶禮福留らが大野と櫟城を築いた翌九月に唐の劉徳高ら二五四人が対馬を経てやつて來た。このなかにはかの郭務悰もいた。劉らは十二月に引き上げたが、今回の郭の來日は前回とは使命を違つていよう。劉徳高は先の六五三年に遣唐使に隨行して入唐していた学問僧の定惠を伴つていた。定惠は内大臣の臣鎌足の子であるが、劉徳高ら唐本国の使者と百濟故地の動向に詳しい郭務悰等の一行の盛大さは、倭国を圧しつつ安定した関係を勧める使命であることを考えさせる。同年八月には熊津の就利山で鎮将の劉仁願の下で新羅の文武王と百濟王族の扶餘隆と会盟して百濟の遺衆の抵抗はひとまず終結したから、百濟故地を統治する劉仁願ら占領軍は倭国との関係を安定させて百濟とで半島南部を固めて、対高句麗戦に向かおうとする

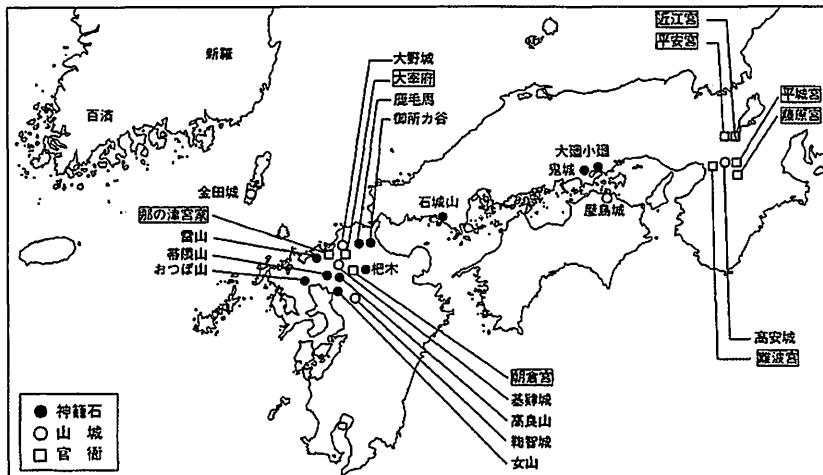


図5 古代山城（神籠石系山城・朝鮮式山城）の分布

ことが唐本国の戦略であると思われる。

この間にも、半島と列島に挟まる耽羅は、憶禮福留らが築城した六六五年八月と郭や劉が十二月に倭国を離れたその翌年の六六六年正月、さらに六六七年七月にも倭国に使節を送つてきた。六六六年正月と十月には高句麗の使節も倭国に来たつていた。倭国には白村江の敗北感のうえに新たな半島情勢の緊張感が加わつてきた。六六七年十一月にはかの百濟鎮劉仁願は司馬法聰をして六六五年十二月に唐の使者の劉德高らの帰

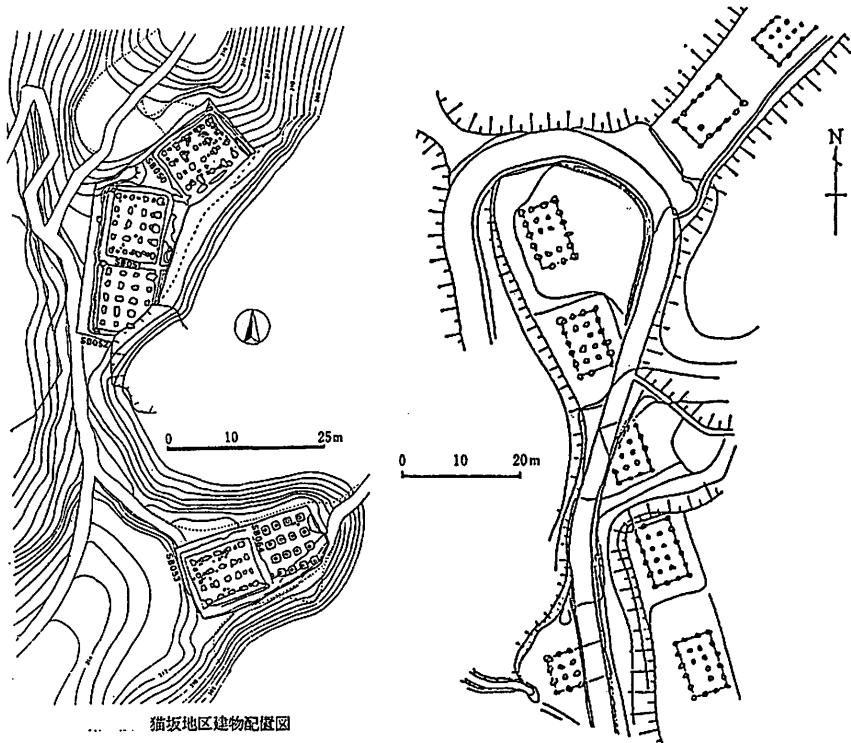


図6 大野城の礎石建物群2例
横田義章 1983「大野城の建物」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢 上巻』吉川弘文館 より転載

国を送つた遣唐使の境部連石積らを大宰府に送つてきたが、ここにも唐は倭国との安定な関係を勧めて、高句麗戦に進むのである。

そこで、倭国は境部連石積や法聴から唐や

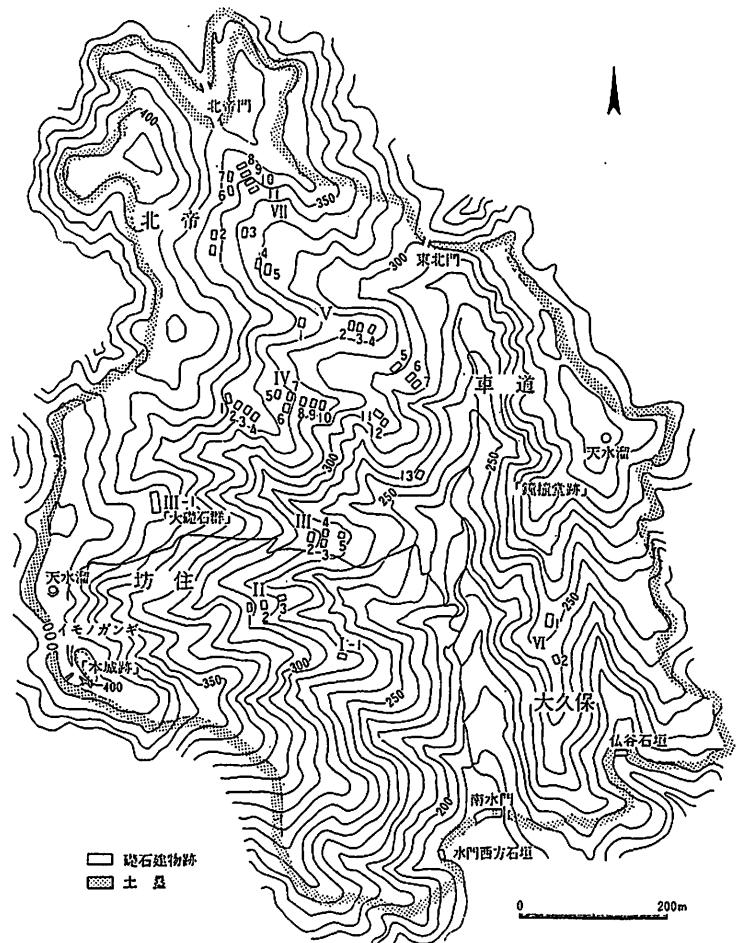


図7 基肄城跡全体図
田平徳栄 1983「基肄城考」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢 上巻』吉川弘文館 より転載

半島で進行する高句麗戦等の半島情勢を得たであろう。同月には高安城（奈良県生駒郡と大阪府八尾市）の境）、讃吉（さぬき）国の山田郡の屋嶋城（香川県高松市）、対馬国の金田城（対馬市美津島）を

築かせている（『日本書紀』卷第二十七・天智天皇六年）。唐の本国軍と百濟占領軍、それに新羅軍による高句麗戦という半島戦争による混乱という不慮に備えた対策である。

ところで、鞠智城についてはその築城がいつなのか記録がない。古代の山城では築城記録があるほうが希である。『続日本紀』卷第一・文武天皇二年（六九八）「五月甲申（二十五日）条に「大宰府に大野・基肄・鞠智（くくち）の三城を繕治せしむ」とあることから、鞠智城は大野・基肄城と連携し、かつ大宰府に統轄される軍事の施設と見られるから、その築城は大野・基肄城の二城が築かれた「六六五年秋八月」かと理解されるが、また大宰府と大和を護る金田城や高安城が築かれた第二期の山城築城時であるこの六六七年十一月に築かれたかとも見られる。

白村江敗戦直後には倭国は唐の百濟占領軍と新羅の動向に警戒して対馬から大宰府に至る防人と烽火台、水城を築いたが、敗戦後に倭国は唐軍からの使節を三度迎えると唐軍などの対高句麗戦の戦況の変転に備えて、大宰府と大和を防衛する山城網の強化を図つたものと考えられる。

六六八年には高句麗王権が唐と新羅の連合軍の前に滅亡して、唐は高句麗の故地に安東都護府を置いてここをも間接統治を始めたから、唐の政治軍事圧力のさらなる浸透を防ぐべく、新羅は唐軍の撤退を求める抵抗戦を進めた。やがて、唐は西の吐蕃などに備えて東の新羅と妥協したから、六七五年には新羅と唐の和平が成立した。

この和平は盛んに来日した新羅使から知られたに違いないから、その後に行われた「六九八年五月二十五日」の「大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を繕治せしむ」とはその事情をどう理解されるであろうか。半島情勢は安定に向かうから、この三城の「繕治」にはほかの要因があろう。そのことは

「3・八世紀の鞠智」で述べよう。

さて、鞠智城の地が大宰府防衛網の拠点の一つに選定されたのは、朝鮮半島西部から有明海に至る半島からの文物渡来の歴史がこの地域にも前史として確かにあつたからであろうと考へられる。弥生時代には朝鮮半島の無文土器や中国系の銅鏡が渡来しており、古墳時代には著名な江田船山古墳に副葬された朝鮮系の文物、また五八三年には火葦北国造の阿利斯登の子であり、百濟の官僚として倭国との政治交流の任務を務め、百濟第二位の官位である達率を帯びた日羅の事例（『日本書紀』巻二十・敏達天皇十二年）が想起されるように、有明海と朝鮮半島西南部を往来する海上ルートの交流史は今日からの想像以上のものであろう。

二 鞠智城の築城者

鞠智城は前記した『続日本紀』に文武天皇二年（六九八）五月二十五日に「大宰府に大野・基肄（きい）・鞠智（くくち）の三城を繕治せしむ」とあることが記録の最古である。この記録からは鞠智城が三十三年前に築かれた大野・櫟（基肄）城と連携する山城であること、またこの三城を「繕治」したこととは大宰府を中心とする連携を強化する施策であつたことが知らされる。その「繕治」とは城壁の補修と強化のほか城内の施設を充実することでもあつたに違いない。その連携強化を内外の諸事情から考察する前に、鞠智城を築城した人々について考察しよう。

鞠智城の築城時期は白村江敗戦後の間もない六六四年に、対馬島・壱岐島等に、防（さきもり）と烽（すすみ／のろし）を置き、また筑紫に水城の大堤を築き、また翌六六五年秋八月には遣達の率答・

火十本、春初に長門国の城を、達率の憶禮福留と達率の四比福夫には筑紫國の大野と椽（き）の二城を築かせて、水と山城とによる大宰府防衛の第一歩が構築された頃かとも考えられる。しかし、また、倭国には白村江の敗北感に加えて、唐の百濟占領軍を中心として高句麗を攻撃しようとする新たな半島情勢の緊張感が漂い、六六七年十一月に大和に入る高安城や讚吉国山田郡の屋嶋城、また対馬に金田城を築いて半島情勢に備えたが、この頃に鞠智城は築かれたかとも考えられてよい。

そこで、鞠智城を「きく」「ち」ではなく「くくち」と読む『日本書紀』の古訓を糸口にこの山城の築城者層について考察して見たい。「鞠」「智」



図8 温故創生之碑の百濟高級貴族像

鞠智城の築城を指導したと想定する「達率憶禮福留」が何事かを指し示している。

は今日の韓国語音では「厩」(K uk)「走」(C hi)である。一五二七年に崔世珍が編纂した漢字の字訓辞典である『訓蒙字會』でも「鞠」「智」はやはり「厩」(「K ik)「走」(C hi)である。これを今日流に仮名表記すれば「くくち」となる。鞠智城の「鞠智」が「くくち」と訓(よ)まれたのは百済の音に由来するのではないかと、思われる。

また、「智」或いは「知」は新羅の貴人の人名末尾によく表れる漢字表記である。百済人の例では六六〇年十月に佐平の鬼室福信が百済の十六等の官位のなかでは第一位である「佐平の貴智」を倭国に派遣して、唐人の捕虜百余人を献じたことがある(『日本書紀』卷二十六・齊明天年)。また、六六二年六月には百済の「達率の萬智」が来日している(同卷二十七・天智天皇元年)。

そこで、六六五年に長門国に城を築いた百済官人の「達率答・火十本・春初」や筑紫国に大野城と櫟(き)城を築いた「達率憶禮福留と達率四比福夫」の例を見れば、筑紫の二つの山城と連携するこの鞠智城の「鞠智」とは百済では上位の官位である佐平や達率を帯びた百済からの亡命官人の名前ではなかつたかと、考えられる。この「鞠智」が築城に際してその土地の選定に始まる築城のプランナーとして城名に名を残す程の貢献をなしたものかと考えられるのである。

この「鞠智が築いた城」と言う「鞠智城」は後述のように九世紀では「菊池城院」として現れる。二世紀にも近いその間に、築城プランナーの百済人に由来するかと考えられた「鞠智」(K uk C hi・くくち)は「鞠」(K iku・きく)あるいはその旁の「菊」(K iku・きく)の漢字音に従つて、「菊」(K iku)へと変わり、「智」も同音の「池」へ交替して、「菊池」(K iku C hi)という美字をもつて和語化したのであろう。

『三国志』魏書・烏丸鮮卑東夷伝の倭人条（『魏志倭人伝』）には「狗奴国」があり、「其の官には狗古智卑狗あり」とある。この「狗奴国」を熊本県北部に比定して、「狗古智」を「くこち」と読んで、これを「菊池」の語源と見る理解もあるが、この理解は邪馬台国の所在論とも関係して、「狗奴国」の所在も東日本にも比定される説も盛んであり（一）、三世紀半ばの「狗古智」を七世紀末の「鞠智」や九世紀末の「菊池」の淵由とすることには躊躇を覚える。

三 八世紀の鞠智城

白村江敗戦直後の危機感と唐の百済占領軍と新羅軍による高句麗戦という朝鮮半島の動向に備えて築かれた鞠智城をはじめとした西日本の朝鮮式山城は、高句麗が滅び、唐と新羅の和平が産まれて半島情勢が安定に向かつた七世紀末からはその存在意義は変化したものと考えられる（三）。

その変化は半島情勢の安定とともに倭国の体制の整備にも由来する。まず、朝鮮半島では六六八年に北の高句麗が滅亡した後、唐は平壤に安東都護府を置いて、また扶餘においていた熊津都督府とともに將軍の薛仁貴や劉仁願等を頂点とした半島支配を始めた。六七一年十一月には対馬から大宰府に郭務悰が二千人の百済人を四十七隻の船に載せて倭国に向かつてることを知らせてきた。亡命百済人は近江の蒲生等の地に安置されたが、他の安置先にはかの百済官人が築いた山城の付近の地もあつたのではないか。山城と渡来人系の遺跡・遺物との関係に関心が及んで来る。

さて、新羅は六七二年より、高句麗の故地で唐軍に抵抗する勢力に加勢して、唐軍の撤退を迫る運動を始めた。そこで六七四年には唐軍は新羅に進軍し、新羅王を文武王に替えて唐に宿衛していた文

武王の弟の金仁問を据えようとさえした。両軍の戦いは六七五年二月まで続いたが、新羅がこれまでの反唐行動を唐に「謝罪」したから、朝鮮半島は安定に向かうことになった。この唐と新羅両国の和平の背景には、唐が西の吐蕃との対立に重点を移すという広い範囲の国際関係があつた。

新羅は高句麗が亡んだ六六八年九月以降にも、また唐軍と対立していた時期にもそうであつたが、半島に安定が到来した以後も盛んに倭国に使節を派遣して来た。また、遣新羅使もこの間の七〇〇年まで十度送られている。新羅との外交が盛んに進められた時代である。

倭国が律令を体制の中核に置いた日本国を形成する過程の外交は新羅ばかりでなく、九州南部と南島勢力へは慰撫策として進行することになる。

六九八年の四月十三日には、「文忌寸博士（ふみのいみきはかせ）ら八人を南嶋に遣り、国を覓（もとめ）しむ。因りて戎器を給う」（『続日本紀』卷一・文武天皇二年）ことがあつた。大宰府が大野、基肄、鞠智の三城を繕治したのは、この翌月の「五月二十五日」のことであつた。

この大宰府に連なる三城のなかで、鞠智城はその南方に位置する立地から判断すれば、この城が奄美等の南島勢力に向けられた倭国政権の慰撫策にも対応することが読みとれる。半島情勢が安定に向かうこの時期に大宰府に連なる三城を繕治したことは、大宰府に至る交通路の要所に立地する山城とその城内の施設を整備し、新羅使のみならず隼人や南島の使節に迎接の初期の儀礼ばかりでなく、山城の防衛施設をも通じて倭国の威を各使節に感得させることではなかろうか。新羅の王京の金城（慶州）には南に南山新城、東に明活山城、西に西兄山城、北に北兄山城を配置していた。日本との外交摩擦が頻発した八世紀の二十年代では、まず七二二年に日本からの侵攻を恐れて、金城に南から入る

経路に關門の長城とその東に萬里城を築くに至つてゐる。

「国覓使（くにまぎのつかい）」を南島に派遣して、また三城を繕治した翌年の文武天皇三年（六九九）「秋七月辛未（十九日）」には、「多櫛・夜久・菴美・度感（たね・やく・あまみ・とく〔徳之島〕）等の人、朝宰に従いて來り、方物を貢ぐ。位を授け、物を賜うこと」があり、「度感嶋の中國に通うこと、是より始る」こととなつた（同卷一・文武天皇三年）。大宰府では西から新羅使を盛んに迎え、また遣新羅使を盛んに派遣するばかりでなく、ここに至つて南からは度感嶋の使者等を迎えることになつたのである。

律令制を布いた倭国は新羅使とともに度感嶋をはじめとした南島勢力の使者を迎えて、「中國」たる威容をまず九州の地で外来の使節に感得させる装置が求められるが、そのひとつとして大宰府に連なる山城の強化など「繕治」という整備がなされたものと思われる。その契機は遣新羅使が新羅の金

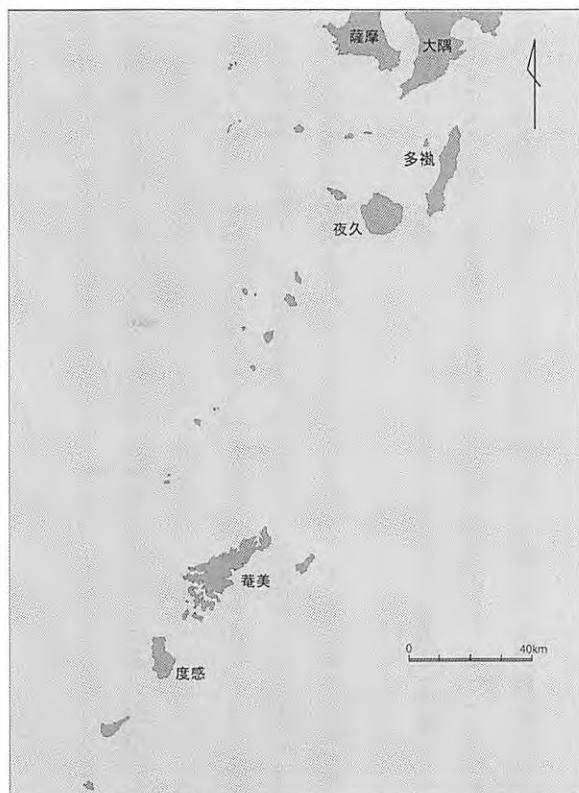


図9 古代の薩南諸島

城に至る路程や金城に在京中に眺望した山城とその威にあつたのではなかろうか。築城して三十三年ほどを経て大宰府の東西に座る大野、橡城、そして南の鞠智城を「繕治」した外交と政治の背景のひとつがここにあろう。同年の八月二十日に、かの六六七年に築城していた「高安城を修理」したのも、その一環であろう（同卷一・文武天皇二年）。

ただ、翌年「十二月甲申（四日）に、大宰府に三野（日向国児湯郡三納郷）・稻積（大隅国桑原郡稻積郷）の二城を修（つぐ）らしめ」（『続日本紀』文武天皇三年）たという新たな築城は隼人勢力への対策であろう。（四）

隼人や南島の勢力を慰撫・懷柔する策は、その策に接するまず隼人の勢力から抵抗を受けることがある。隼人と南島との間にある利害関係の変動、或いは隼人は遠交近攻策の対象となるやも知れない危機感を覚えるからである。七〇〇年の「六月庚辰（三日）には、薩末比売・久売・波豆、衣評督衣君県、助督衣君弓自美（さつまのひめ・くめ・はつ、えのこほりのかみえのきみあがた、すけえのきみてじみ）と肝衝難波（きもつきのなには）は肥人（くまびと）等を従え、兵を持って覇国使（くにまぎのつかい）の刑部真木（おさかべのまき）等を脅かす」という抵抗を起している（『続日本紀』卷一・文武天皇四年）。

隼人の叛乱は七〇二年、七一三年と七一〇年と続いている。七〇二年の叛乱は薩摩と多櫛（たね）が律令国家による民を戸籍に編成すること、即ち国家からみれば「天皇の徳治に化する」ことにに対する反抗であつたから、大宰府はこれに「征討」を加え、ついには薩摩と種子島の民を戸籍に付けて支配を強化することになつてゐる。（五）

隼人の抵抗には大宰府を拠点として鎮圧軍が組織されるが、鎮圧の戦力には記録がないからと言つて鞠智城の組織が無関係であったのではなかろう。大宰府から南に向かう最大の山城として、鞠智城は隼人の叛乱に向かう基地としても機能したであろう。

薩摩、大隅、日向の三国には徙民策を進めて、隼人の弱体化を図つたから、大隅の国守の陽侯史麻呂が七二〇年の隼人の反乱のなかで殺害されている。これには大伴旅人が征隼人持節大将軍となつて一万余の兵を率いて鎮圧にあたつたが、一年半近くを費やしている。その間に、隼人一千四百余人が斬首され、七二三年になると大隅、薩摩の隼人六二四人が朝貢する服属が進んでいる。

こうした八世紀初期の九州南部地域において、対外的には「日本」として現れる倭国が律令制を行なせる過程で起こつた隼人の叛乱に、鞠智城は無縁ではなく、むしろ機能したであろう。朝鮮半島情勢に対応して築城した七世紀末葉の時期とは異なり、威と武を備えた新たな構造がこの段階の鞠智城には備わつてはいないうだろうか。

四 九世紀の菊池城院

九世紀半ば以降では、西海上に新羅海賊が出没するという対外的危機が発生する。大宰府を中心につきの危機への対応策が採られるが、鞠智城が菊池城院と改まつた時期は不明ではあるが、菊池城院もこの危機対応に無関係ではない。

対外危機の兆しは新羅からの流民の渡来から始まる。八三四年では、それまでの新羅からの流民は遠江、駿河、陸奥など東国に徙民したが、ここに至つて流民を放還や追却している。日本内では律令

制が弛緩しており、新羅流民の定住が社会不安が加速することを恐れたのである。（六）

新羅では内陸部では草賊と呼ばれる叛乱が継続し、海上では新羅流民を唐に売る海賊が跳梁していた。この時、渡唐して軍人となっていた張保皋は新羅王の興徳王が寧海軍使という唐から担わされた職約を実行すべく王に海賊の掃討を要請した。張保皋は興徳王から清海大使に任せられると、東シナ海から海峡に及ぶ海上の治安維持をなすべく清海鎮（全羅南道莞島）を拠点に制海権を維持して新羅、日本、唐との間の貿易に従事したのである。

ところが、張保皋は経済力を高めると政治力を求めて、わが娘を新羅王室に入室させることを求めるに至つて、これが拒否されると、張保皋は王室と対立し、ついには八四一年十一月に暗殺されてしまった。その後、八五一年二月にはその拠点であつた清海鎮は廃止されたから、海上の秩序は壊れて、新羅海賊が再び出没することになったのである。

この間の八四三年八月には対馬島の防人が正月以来、新

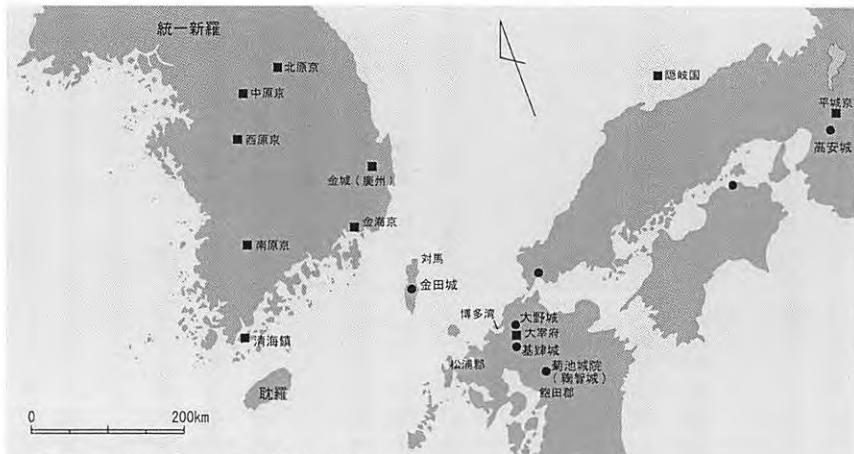


図 10 8世紀・9世紀の鞠智城とその周辺

羅から毎日鼓声が響き渡つて来る、と報告した。張保皋の死去とこれに続く副将の李昌珍の「反乱」とその平定と言う清海鎮勢力の抵抗に対応する新羅南部の混乱が大宰府に不安を呼んでいる。

また、鎮の廃止後の八五五年四月、新羅は日本に使節を派遣したが、使節のもたらした執事省からの牒の文書が、日本側の不興を買ひ、新羅使節は帰国させられると言う外交の摩擦があり、新羅への不安は募ることになる。

清海鎮の廃止後、西日本には新羅人の渡来が再び頻発することとなつて、新羅に向けられた不安はさらに高まる。八六六年七月には、肥前の基肆郡の大領の山春永（やまのはるなが）は新羅に渡つて、兵器の技術を学んで仲間とともに対馬島を奪取しようとした、と大宰府に密告されている。同年には、隠岐の国守であつた越智貞原は新羅人とともに反逆を謀つたとも誣告されていた。このため、同年十一月には能登から大宰府に至る日本海側に海防を強化し、神仏には護国を祈願している。

この对外不安は間もなく現実のものとなつた。八六九年五月二十二日夜、新羅の海賊船二艘が博多湾に現れたのである。賊船は豊前から貢納される絹綿を略奪して逃亡した。この件は「往古」にも「前聞」したことのない「国威」を「損辱」した事件として永く日本側に記憶されることになつた。

この新羅海賊が大宰府の外港である博多津にまで來たつて貢納品を製つたという行為から見ると、これは漂流船などではなく、組織化された新羅海賊の初例である。

同年十二月には新羅の賊船や大宰府の居舎や門楼と兵庫に大鳥が鳥合した怪異にも新羅からの「兵寇」を危惧して、神仏への祈願は高まり、また博多湾の警備を強くした。

翌八七〇年二月には、新羅に捕捉されていた対馬島の乙屎麻呂が逃げ帰り、新羅では材木を切り出

して大船を建造し、また、兵士の訓練を行っていたが、それは対馬島を討ち取るためと言う新羅の風聞を伝えてきた。

この伝聞は新羅への警戒心をさらに高めた。新羅の貿易商人であつたの潤清ら三十人は、前年に豈の絹綿を略奪した新羅の賊船の仲間であると疑われ、また大宰府管内に寄寓する新羅人も新羅が侵入して来れば、これに内通するであろうと疑われて、ともに拘束されて、九月には武藏、上総、陸奥に配置された。同年十一月には、大宰少式の藤原元利万呂は新羅王と内通しているとの疑いもかけられた程、大宰府における不安と動搖である。

さらに、八七三年三月には、正体不明の二艘の船が薩摩の甑島に漂着した。大宰府では、乗船する六〇人の「頭首」である崔宗佐と大陳潤は渤海国人であり、徐州平定の祝賀のために唐に派遣されたが、海難に遭つて甑島に漂着したことを把握した。だが、薩摩の国司は二人が今日のパスポートとも言える「公驗」を持参せず、「年紀」も正しく書かぬことから、渤海国の使者であると言う二人の自供に不審を抱いた。二人は渤海人を騙つた新羅人が日本の沿海を探るものと、疑つたのである（以上『日本三代実録』巻十三、二十三）。

入唐僧の円仁は『入唐求法巡礼行記』のなかの八三九年八月十三日の記録に、渤海の貿易船が山東半島の先端にある青山浦に停泊していたことを記録していたが、渤海の貿易船の範囲は東シナ海から拡大しつつあつたのである。さらに、張保皋の死去後、九世紀後半には東シナ海を舞台とする貿易には、出身国や公私を問わない現実的な集団が形成され始めていたのである。甑島に漂着したと言う船は、貿易の寄港地を西南九州にも求めた新しいタイプの貿易船かと考えられる。（七）

このように、西日本において新羅と新羅人への警戒心が高まる中で、八九三年五月には、新羅の海賊は肥前の松浦郡を、翌閏五月には肥後の飽田郡を襲つて逃亡した。翌八九四年には、新羅海賊が二・三・四・九月と頻繁に対馬島などを襲つてゐる（『日本紀略』前篇）。この内、九月の新羅海賊は四十五艘で対馬島を襲撃したが、文室善友らが善戦して賊の三〇二人を殺害し、多数の兵器を獲得してゐる。

この戦いで捕虜となつた新羅人の賢春は、新羅では不作から飢錐が発生したから、国家財政を補充するために王の命令を受けて対馬島を襲つたと告白したが、その規模は実に船百艘と二五〇〇人であつたとも言う（『扶桑略記』二十二）。確かに、これより先の八八九年、新羅では慢性的に窮乏する国家財政の補充のために賦税の取り立てを厳しくしたから、各地に反乱の起つたことが『三国史記』新羅本紀には記録されている。新羅の王命による海賊行為であつたと言う賢春の告白は、捕虜の命乞いのために発した虚言ではないよう思われる。

大宰府管内では新羅の流民と海賊の出没に不安感を興してゐる。天安二年（八五八）閏二月二十四日に、肥後国では「菊池城院の兵庫、自ら鳴」り、また翌二十五日にも「又、鳴る」ことがあつた（『日本文徳天皇実録』卷十）。かの鞠智城が二百年近くを経て、菊池城院として記録に現れてゐる。この変化の背景には、百濟滅亡後の対外危機に備えて築城された「武」の性格と、また隼人や南島勢力に対応する「武」とともに「威」を備えた「繕治」のこの山城の意義が、ここに来て、再び対外危機に対応する「武」の意義を強めることになる。

この年の六月二十日にも、大宰府に「肥後国菊池城院の兵庫の鼓、自ら鳴り、同城の不動倉十一宇、火（も）ゆ」との報告があつた（『日本文徳天皇実録』卷十）。兵庫の変異の報告は翌貞觀元年（八五九）

正月二十一日にも「筑前国志摩郡の兵庫の鼓、自ら鳴る。庫中の弓矢に声有り外に聞こゆ」とのことが大宰府に届いた（『日本紀略』前篇十七・清和天皇）。「兵庫の鼓が自ら鳴る」とは兵士の召集であり、菊池城院と志摩郡の兵庫がともに警戒する対象とは西海に跳梁する新羅海賊の襲来のことである。菊池城院が大宰府に連なる軍事的施設であり、ここが外敵の前面になることも危惧されたのである。

貞觀十七年（八七五）六月には、「大鳥、肥後国玉名郡の倉に集い、西を向きて鳴く。また、数百の鳥群、菊池郡の倉を葺く葦草を噬み抜く」ことがあった（『日本三代実録』卷二七・清和天皇）。また、元慶二年（八七八）九月七日にも「大鳥、肥後国八代郡の倉の上に集う。宇土郡の蒲智比咩神社の前の河水、赤く変すること血の如し」と言う怪異が続いた。陰陽寮はこれらの怪異は、肥後国の風水火の気が整わなものと占つたが、この肥後国菊池城院と四郡に現れた怪異、なかでも大鳥が玉名郡倉から西を向いて鳴くことは何を予兆しているのであろうか。

元慶二年（八七八）十二月十一日には、大宰少貳の嶋田朝臣忠臣らは「新羅虜船、我国に向かう。宜しくこれに備うべし」との香椎宮の託宣を得て、刑部大輔の弘道王が伊勢神宮に冥助を祈願し、民部大輔の藤原朝臣房雄や兵部少輔の平朝臣季長が大宰府に出掛け、香椎宮に幣を奉じている。「新羅凶賊が我隙を窺わんとする」の不安は、先の「肥後国に、大鳥集い、また河水、赤く変」した怪異に結び付けられて解釈されることになる（『日本三代実録』卷三十四・陽成天皇）。

不安な予兆は続く。元慶三年（八七九）三月十六日にも豊前国の八幡大菩薩宮にある神功皇后の前に備えた飴が九十片に破裂したことがあり、破裂する時の鳴き声は犢の細い声のようであった。また

肥後国の菊池郡城院の兵庫が自ら鳴ることがあった（『日本三代実録』卷三五・陽成天皇）。菊池郡城院の兵庫が自ら鳴ることは四度目である。

この不安の予兆は、寛平五年（八九三）閏五月には現実のものとなつた。新羅の賊が肥後国飽田郡を襲つて七人の宅を焼き、肥前国の松浦郡に逃げ去ることが起つたのである（『日本紀略』前篇二〇・宇多天皇）。

菊池城院の兵庫に現れた怪異（八五八年に三度、八七九年）は大宰府の西海に出没する新羅海賊の跳梁に連なる予兆として理解されたが、それは菊池城院が鞠智城の築城以来、朝鮮半島の情勢を警戒してこれに対応する「武」の性格と機能をその施設とともに継承していたからであろう。菊池城院の性格と機能のこの一面は鞠智城と菊池城院の施設構成にどのように見て取れるのであらうか。

おわりに

ここまで論者は日本古代史に精通しないながらも、朝鮮古代の政治と社会の動向に注目して、七世紀から八世紀の鞠智城、そして九世紀の菊池城院の性格を考察してきた。大宰府に連なる鞠智城は朝鮮半島の動向に対応して築城されて以来、その機能を充実してきた。七世紀末葉に半島情勢が安定すると、鞠智城は九州南部を律令体制内に編制する施策にも関係して、大宰府の軍事と外交に連なる要衝として「繕治」されたと考えられる。八世紀を経るなかで、鞠智城は軍事と外交という二つの機能を保持しながら、菊池城院となる。「城」と「院」の二つの機能をひとつの所に備えた菊池城院は大宰府が大野城と基肄城を府の東西に備えて「府」と「城」を分離していたこととは対照的である。山

城のなかに兵制とともにこれとは異なる性格の施設を備えたことから「城院」と改称されたのではないか。その時代は八世紀中のことと見られるが、それは、換言すれば鞠智城が朝鮮式山城の構造と機能からなれば脱却したことを意味しよう。この「城院」の構造は発掘情報からどのように読み取れるであろうか。

【参考文献】

- (一) 森 公章『「白村江」以後—国家危機と東アジア外交—』(講談社選書、一九九八年六月)、龜田 修一「日韓 古代山城の比較」(『古代武器研究』第九号、古代武器研究会、二〇〇八年一月)
- (二) 西谷 正『魏志倭人伝の考古学』(学生社、二〇〇九年四月)
- (三) 小田富士雄「西日本の古代山城跡」(『九州古代文化の形成』(下巻)歴史時代・韓国篇)学生社、一九八五年一月)、大田幸博「肥後・鞠智城」(『古代文化』第四十七巻第十一号、一九九五年十一月)、高正龍「韓国古代山城」(『古代文化』第四十七巻第十二号、一九九五年十二月)
- (四) (五) 永山修一『隼人と古代日本』(同成社、二〇〇九年十月)
- (六) 佐伯有清「九世紀の日本と朝鮮」(『日本古代の政治と社会』吉川弘文館、一九七〇年五月)
- (七) 拙 稿「第四章 王権と海上勢力—特に張保臯の清海鎮と海賊に関連して—」(『新羅国史の研究—東アジア史の視点から—』吉川弘文館、二〇〇二年二月)